

子どもを本気でやる

アドベンチャープログラムがここに

——妙高ジュニアアドベンチャー2009

本事業は、平成21年度事業方針における重点テーマ「次代を担うリーダーの育成」を目的とする取組である。

「リーダーの育成」が喫緊の課題として設定された背景の一つには、天然資源に乏しいわが国が今後とも世界から『品格ある国家』として認識され、信頼を得つつ発展し、知的存在感を保持しながら成長を遂げていくためには、国際社会で活躍できる優秀な人材を育成することが重要であるとする、「文部科学省における国際戦略（提言）」（平成17年9月／文部科学省における国際戦略検討会）があると考えられる。また、この中で、国際社会で活躍する人材を育成するためには、義務教育段階から世界、国際社会に貢献したいという夢や目標を持って学習に取り組む「意欲」を引き出すことが重要であることが示されている。

平成18年2月に文部科学省が示した「子どもの意欲・やる気等の向上・低下に係る調査研究成果・事例の収集調査（結果の概要）」では、子どもの意欲を「自己効力感（課題を達成できる可能性の認知）」や「積極性」、あるいは「自己肯定（受容）感」、「主体性」、「リー



「リーダーシップ」など子ども自身が自己を認め、様々な事象に前向きかつ積極的に取り組む力やその行動に着目して捉えている。そして、その上でこれらの子どももの「自己効力感」、「積極性」や「主体性」を向上させ、他者との連帯感を得られ、意欲的な活動傾向を増加させる活動・取組として、成功体験・達成経験を伴う野外体験活動などを挙げている。

以上の提言等とこれまでの国立妙高青少年自然の家が実施してきた事業成果及びリーダーの育成に関する先行研究を、国立妙高青少年自然の家の施設業務運営委員会・プログラム企画専門部会などで十分に検討した結果、困難に立ち向かおうとする力、自ら考え行動する力、創造力を働かせ工夫して課題を解決しようとする力、集団を目的やねらいへ導こうとする力、集団内の人間関係をよりに円滑にしようとする力、を青少年のリーダー性を特定する要素(資質・能力)として絞り込んだ。

本事業では、国立妙高青少年自然の家が蓄積している青少年を対象とした長期キャンプについてのノウハウをフルに活用し、現代を生きる青少年に関わる課題の一つである「リーダー性の育成」に特化した長期間のチャレンジキャンプを展開する。そのため、各参加者の資質・能力の向上を目指す方策として、個人活動(セルフチャレンジ)と集団活動(チームチャレンジ)を取り入れた野外活動場面を意図的に設定する。具体的な活動としては、長距離サイクリング(妙高 寺泊間約120キロや佐渡島一周約180キロ)を中心とする陸上活動だけでなく、シーカヤックでの越佐海峡横断(寺泊 赤泊間約40キロ)を中心とする水上活動も取り入れることで、多様な活動プログラムの設定が可能となった。

また、「参加者のだれもがリーダー」を合言葉に、一人一人の参加者がもつ(あるいは秘めている)リーダーとしての資質・能力を発揮しやすい環境を創り出すことで、本事業によって獲得されたリーダーとしての資質・能力の持続性についても追跡した。



この夏 出会う 新しい自分

妙高ジュニアアドベンチャー2009

14泊

15日

のチャレンジ



7月
26日(日)
~
29日(水)
【第1ステージ】
トレーニング
キャンプ



キャンプでは自分はどうなめあてで取り組むか、グループではどんなことができるのかの考えを出し合い発表があった。

2日目からは、野尻湖周辺の湖楽園キャンプ場に移動し、テントで宿泊しながらのカヌートレーニングが始まった。雨が降ったりやんだりするあいにくの天候の中、第3ステージで越佐海峡を横断のためのカヌー技術と長距離キャンプに必要な基本的キャンプ技術(テント設営や野外炊事の仕方など)を学ぶ。

カヌートレーニングではパドルの使い方やカヌーが転覆したときの着脱の方法等を学んだ。初めてのカヌー体験。最初は思うようにカヌーが進まず、体力的にも精神的にもきつい様子である。しかし、3日目は野尻湖を周遊できるほど上手にカヌーを操作することができるようになった。

また、キャンプ生活では、テントの張り方や野外炊事の方法を学んだ。グループで話し合い、協力しながらの活動を体験する。はじめは時間がかかるが徐々に役割分担や助け合いが生まれ、スムーズに活動できるようになって行く。

7月26日(日)午後、抽選で選ばれた24名の子どもたちとその保護者が国立妙高青少年自然の家が集まった。約2週間前の事前説明会とは一味違う気持ちでの集合となったようだ。いよいよ今日から2週間のチャレンジが始まる。開校式の後ともう一度どんな人が集まっているのか様子を見合う。簡単なゲームでまずは名前を確認しあつた。

自分はどうなめあてで取り組むか、グループではどんなことができるのか。

夜はマインドマップでのふりかえりを一

一人で行った後、グループ内で発表しながら、明日のめあてを確認しあった。

【第2ステージ】
サイクリング
トレーニング、
長距離サイクリング

7月
30日(木)
~
8月
1日(土)



このステージではサイクリングトレーニングと初めての長距離サイクリングを実施。

国立妙高青少年自然の家周辺でサイクリング技術と交通マナーを学んだ。天候は雨。視界も悪かったが、本番での活動も同じ状況が予想されるので、子どもたちは真剣に取り組んでいた。

翌日から妙高から寺泊までの移動型キャンプが始まった。最初は大潟キャンプ場まで約40kmの行程。天気は晴れ。水分補給の仕方やベース配分も考え、自転車をこぎ続けた。

キャンプ場に到着した子どもたちは、自分たちだけでテントを設営したり、野外炊事をしたりする活動を体験し、話し合いで役割を決めながら協力の仕方を学んでいく。

翌日は、寺泊までの約70kmの行程であ

る。交通量の多い国道を安全に走行したり、苦しい上り坂を上ったりするために互いに「後ろから車」「段差があるよ」「あともう少してってっぺん」など声を掛け合い目的の地まで向かう姿も生まれる。途中休憩しているとき、新聞で情報を知った近くの方からスイカの差し入れをいただいた。思わぬ差し入れに子供たちも疲れが癒された。

そして、寺泊の目的地にゴール。みんなで健闘をたたえあう。その夜は、第2ステージをふりかえり第3ステージのめあてを話し合った。



【第3ステージ】
佐渡海峡
横断キャンプ

8月
2日(日)
~
4日(火)



今日からは、湖とは違う波の高い海でのカヌートレーニングが始まる。

波にとまどいながらも練習を始めた。中には波に酔う子どももや、思うように進まず、体力を消耗してしまう子どももいる。2日後に佐渡海峡を横断することができるのか？ちよつと不安になる1日であった。夜のふりかえりでは、本番に向けてどのような気持ちで取り組むかを考え話し合った。

また、ここでもご近所の方が、新聞で見たとわざわざ応援に来てくださり、差し入れもしていた。

海でのトレーニング最終日(9日目)は天候にも恵まれ、波になれるための活動や海でのカヌー操作のこつを学んだ。少し沖まで漕ぎ出し、本番に備えた。いよいよ佐渡海峡横断当日。まだ暗い早朝に準備を整え5時ごろ寺泊港に集合。出発式を行い、みんなで気合を入れ出港した。

漁船3隻に囲まれながら、まずは、6人の子どもたちがシーカヤックに乗り込む。横断は一人一人が精一杯こいで次のメン

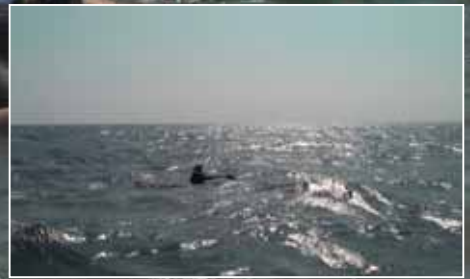


バーと交代しながら進む。天候は曇り時々晴れ。漕いでも漕いでもまだ佐渡は近づかない。早朝はほとんどなかった波も、昼を過ぎたころからだんだん大きくなる。3隻の漁船の距離も少しずつ離れていった。

後半はさらに波も高くなり、波で他の艇が見えなくなる。子どもたちにも疲労の色が見えている。途中波に酔ってしまう場面も。しかし、佐渡の赤泊港がはつきりが見えたとき、誰がカヌーに乗るか子どもたちの話し合いが始まった。そして最後に漕ぎ出す仲間に思いを託し、自分のネームプレートを手渡す場面もあった。

そして、ゴール。全員がカヌーをつないで約11時間かけ赤泊港に到着。地元の方數十人も出迎えてくれた。

疲れはピークに達していたが、やり遂げた時の達成感は充実していた。



いよいよ佐渡一周長距離サイクリングの始まり。小木港で自転車のチェックをし、いよいよスタート。小木から入崎キャンプ場まで約70kmを3グループに分かれスタート。佐渡の起伏激しい道のりを励まし合いながら走った。本格的な長距離サイクリングと夏の暑い日ざしや自転車トラブルも重なり、徐々に体力と気力を奪われる子どもたち。一人がりタイヤを訴えると連鎖し、次々とリタイヤ希望が出てくる。子どもたちの中に、ちょっと休んで車で移動し、また自転車に乗れば良いという安易な考えが生まれる。その夜、全員を集め、一度リタイヤしたら、その日は自転車に乗れないことを伝えた。そうすることで、安易に休憩をとろうとする考えを一掃した。

佐渡2日目の入崎から姫崎まで約70kmには、佐渡で一番の難所、跳坂(Z坂)が待っている。昨日の「リタイヤしたらもうその日は自転車に乗れない」という思いから、子どもたちは、ちょっと苦しくとも、弱音を吐かず、難所を走破して行く。そして互

8月
5日(水) ~ 7日(金)
【第4ステージ】
佐渡島一周
サイクリング
キャンプ





に。子どもたちの話し合いが始まる。今までの体験を生かし、どのようにゴールまで行くのか。一人一人が自分の思いや願いを出し、話し合いは続いた。スタッフは何も



いに励ましや安全確認の声を掛け合い見事全員が姫崎キャンプ場まで走破した。
佐渡最終日は朝から土砂降りの天気。大雨の中を姫崎から小木まで約40km狭い道や急な坂道、暗いトンネルなど気をつけて走行。小木に到着したときはみんな手でたたいて喜び合った。

8月
8日(土)
9日(日)

【第5ステージ】
ラストラン、
ふりかえりキャンプ



いよいよ最後のサイクリング。直江津から妙高までの上り坂約40kmに挑む。国道18号線の側道を通って初めは順調に進んで行く。しかし、最後はスタッフが安全確認をする走行ではなく、子どもたちだけで行かせたい、いきたくないという思いが強くなる。そこで、自然の家まで急な上り坂残り2kmを子どもたちだけで走行すること

最高の達成感と充実感。

指示を出さず、ちよつと離れた後ろからついて上ることとした。

いよいよラストラン。子どもたちは自分に役割を決め、一人一人が今できる精一杯のことをしようと走り始めた。今まではスタッフがしていた安全確認の動きも子どもたちが見事にやっている。緊張感の中にも子どもたちの生き生きとした声や動きが表出した。そして、ゴール。保護者や自然の家の職員が出迎える中、笑顔での到着となった。最後には、全員が達成感と同時に感謝の気持ちを伝えあった。

最終日は、アンケートと2週間のふりかえりを文章に書き留めた。閉校式では、代表3名が感想を発表。自分の成長、今まで気づかなかった周りの人の優しさに触れ、感謝の気持ちでいっぱいになり、涙を流しての感想発表となった。



【最後に】

この2週間、子どもたちは常にふりかえり、考え、行動した。時にはぶつかり合い、時には支えあいながら。そして自分の中に新しい自分に気づき、それを受け入れ、大切にしたい。

このチャレンジキャンプは子どもたちを本気にさせる仕掛けがある。それは、国立妙高青少年自然の家が考えるリーダーとしての5つの力とつながっている。5つの力とは、困難に立ち向かおうとする力、自ら考え行動する力、創造力を働かせ工夫して課題を解決しようとする力、集団を目的やねらいへ導こうとする力、集団内の人間関係をより円滑にしようとする力である。

この5つの力を引き出すために、困難な状況を設定し、子どもたち自らが解決できるように振り返りや話し合いの時間を十分に与えた。そして、それを繰り返すことで、子どもは本気になり、次々と困難な状況をクリアしていったのである。